

「あまおう」8月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は平成29年7月19日現在の登録資料に基づいて作成されています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

現在の苗の状況と気象の経過

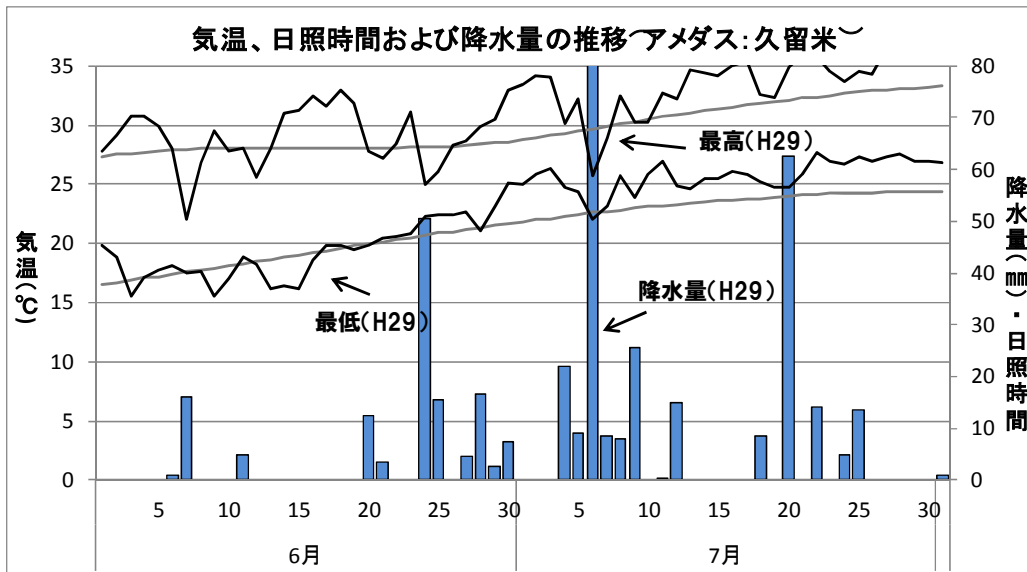
【生育概況】

7月上旬の大雨の影響で、根量が不足し、葉の展開が停滞している苗が一部見られます。

【病害虫発生状況】

7月中下旬頃より炭そ病の病斑が散見されています。6月から7月にかけて気温が高く推移した影響もあり、今後発病株の増加が懸念されます。また、カキノヒメヨコバイによる被害が多く見受けられ、ハダニ類やアブラムシ、輪斑病の発生も見られます。

【気象の経過】 (アメダス久留米より)

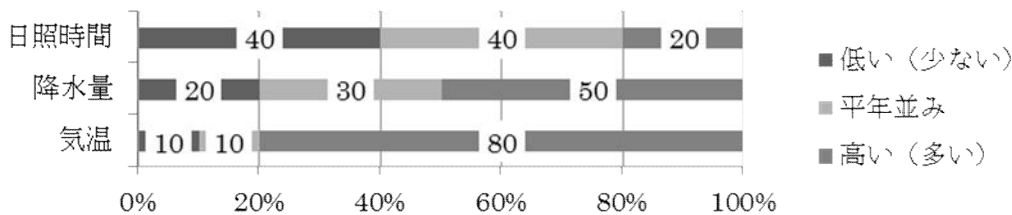


気象予報と今後の見通し

【気象予報】

福岡管区気象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

●1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 8月5日~9月4日 発表日8月3日)



【今後の見通し】

気温は平年より高く、降雨量は平年並か高く、日照時間は平年並か少なくなる可能性が高い予報です。

育苗期の懸案事項と対策

[懸案事項]	[対 策]
①花芽分化の遅延	①寒冷紗で被覆することで、苗の温度を下げる。 被覆する時期 (株冷) : 株冷入庫前 (夜冷) : 処理期間中 (但し、日中35℃以上の高温になる場合) (普通ポット) : 8月下旬から
②育苗期後半の窒素切れ	②窒素の効き具合を観察して、不足している場合は灌注や葉面散布によって追肥を行う。
③炭そ病、疫病の発生拡大	③定期的な薬剤散布、発病株とその周辺株のほ場外への持ち出し。

育苗管理

クラウン径10mm以上の充実した苗が目標です。

【 作型 】

- クラウン径が10mm未満の苗は、無理して早い作型にせず、苗の充実を優先させる。

「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

作 型 (予冷庫利用)	入 庫	出 庫	定植予定日	陽光処 理	収穫開始
株冷Ⅲ型	8月26日	9月16日	9月16日～	2回	11月中旬
株冷Ⅳ型	9月4日	9月20日	9月20日～	1回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	—	11月上～中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	—	11月中旬
普通ポット			9月20～25日	—	12月上～中旬
普通晩期(厳寒期安定出荷を目的)			9月26～28日	—	12月下旬

【 施肥 】

- 根傷みしている場合は培土への追肥を控え、根が回復するまで葉面散布を行う。
- 作型に応じて最終追肥時期を決め、計画的に施肥を行う。

液肥の最終追肥時期の目安

作 型	3.5寸鉢	3寸鉢
夜冷 (8月中下旬処理開始)	処理 10日前	処理 5日前
株冷Ⅲ型 (8月26日入庫)	8月 5日	8月10日
株冷Ⅳ型 (9月4日入庫)	8月10日	8月18日
普通ポット	8月25日	8月30日

※ポットが小型なほど、薄い濃度で間隔を短くし、肥料が切れすぎないようにする。

【 葉かき 】

- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、葉かき後の葉数は3.5枚程度となるようにする。
- 葉かき作業直後は、「炭そ病」の予防散布を必ず行う (傷口からの感染防止)。

(裏面へつづく)

最終摘葉時期の目安と葉数

作型	最終摘葉時期と摘葉後の葉数
株冷	入庫10日前に3～3.5枚
夜冷	処理開始直前に3.5枚
普通ポット	8月30日頃に3～3.5枚

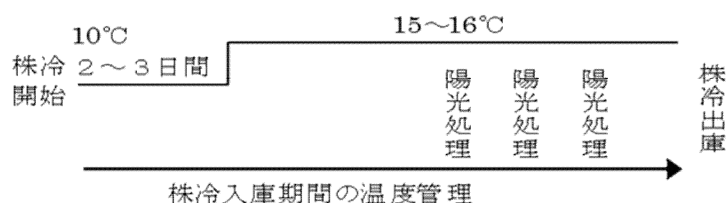
株冷入庫10日前の体内窒素濃度による管理

体内窒素濃度	対策
25ppm以下	葉面散布 2回：OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍など
25～100ppm	葉面散布 1回：OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍など
100～250ppm	かん水のみ
250～500ppm	PK剤の葉面散布 1～2回 入庫2～3日前に試験紙判定で100ppm以下になっているか再調査する
500ppm以上	遅い作型に変更する

【低温処理】

○ 株冷処理

- 株冷処理の間に苗が消耗するため、充実した苗を使用する。
- 株冷入庫時に葉柄中の窒素濃度が25～50ppmになるよう、肥培管理を行う。
- 冷蔵庫内の湿度に注意し、湿度90%以上になるようにする。特に、冷風が直接当たる部分は乾きやすいので、ダンボールや厚紙で風よけをする。



陽光処理

- ① 株の消耗を抑えるため、晴天日に苗を庫外に出し、日光に当てる。入庫15日前後に1回目を行い、その後2～3日間隔で計3回程度行う。
- ② 出庫時間は1日8時間以内とし、乾燥しないようにかん水をし、株の温度が下がった夕方（午後6時頃）に再入庫する。（冷蔵庫内の温度上昇を防ぐため）

○ 夜冷処理

- 処理期間中に肥料切れしないよう、処理開始時には150ppm程度の体内窒素を確保する
- 入庫時の庫内温度は13℃±2℃とする。
- 入出庫時間の目安は、午前10時に出庫、午後6時に入庫とする。気温が高い場合、入庫が早いと庫内の温度が下がりにくいため、入庫時刻を遅くする。
- 処理期間中には、かん水や薬剤散布は行うが、摘葉はしない。

本田準備

例年、8月中旬以降の天候が安定しないため、早めに準備しましょう。

【畝立て】

- 畝は、根が張るスペースを確保し排水性を高めるため、20～25cm程度に立てることが望ましい。
- 耕耘時、ロータリーの爪に土が付かない程度の土壌水分状態で耕耘する。
- 畝立て後はビニルのべた掛けを行う。

病害虫防除

- 薬剤散布は、早朝もしくは夕方散布を基本とする（日中の高温時は薬害発生のリスクが高まる）。
- 本田にハダニ類、うどんこ病、炭そ病を持ち込まないために、早期作型では低温処理直前（最終葉かき後）の防除を徹底する。うどんこ病・炭そ病の罹病株は入庫しない。

トピックス「モベントフロアブルかん注処理によるナミハダニの防除」

ナミハダニは薬剤抵抗性の発達が著しく、年々既存の薬剤の防除効果は低下しています。一方、育苗段階から上手に防除して本圃への持ち込みを回避し、長期間ハダニ類の発生を抑えている例もあります。



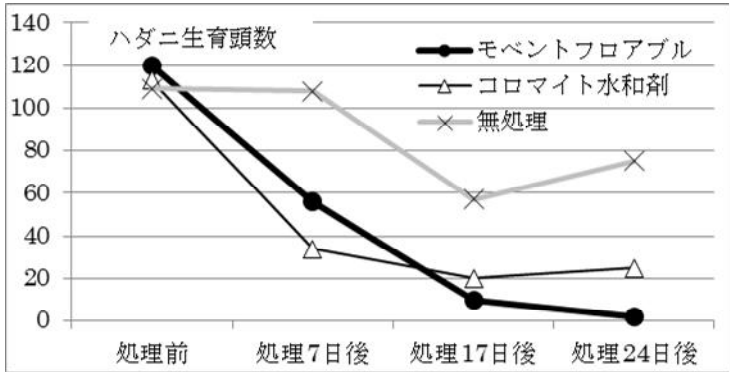
育苗期からハダニが多く、定植前のかん注処理や薬剤処理でも十分にハダニ密度を下げられない方については、ダニが増殖しやすい夜冷蔵庫や冷蔵庫入庫前にモベントフロアブルをかん注処理することにより、定植前からハダニ類を抑えることができます。

● 苗かん注処理のポイント

灌注処理は、夕方処理の効果が高いため、1株に500倍の薬液50mlを確実に苗に吸わせることが重要です。

- ① 薬剤を十分吸わせるため、午後の灌水を控えて、培土を少し乾き気味にしておく。
- ② 根痛みのない健全な苗を育苗すること。（根痛みすると十分に薬液が吸えません）
- ③ 軟弱な苗には、薬害を生じる恐れがあるので、使用を控える。
- ④ カブリダニ類に対しては、長期間影響があるので、カブリダニ類を使用する場合は、影響日数（45日）を確保すること。

< 薬剤処理による36複葉あたりのナミハダニ生育頭数 >



試験区構成
 ・モベントフロアブル かん注 (500倍)
 ・コロマイト水和剤 散布 (2000倍)
 株冷、夜冷入庫3日前処理

< 登録内容の抜粋 >

出典：福岡県農林総試病害虫部調査

作物名	適用病害虫名	希釈倍率	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
いちご	ハダニ類	500倍	50mL/株	育苗期後半	1回	灌注
	アザミウマ類		25~			
	コナジラミ類		50mL/株			

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！